「聖岳化石人骨」を読む

矢野徳弥
（会員・本匠村宇津々）

一　聖岳人骨の特異性

（日中シンポジウム）

昨年十一月、柳江人洞、白蓮洞、大竜潭など日本人の起源にも関係の深い旧石器時代遺跡の多い、中国広西チワン族自治区の柳州市で、日中の学者による「日中古人類と史前文化の源流を探る」シンポジウムが開催されたが、この席上、小片丘彦氏（鹿児島大学教授・解剖学）により、聖岳人の後頭部骨片の特異な形質に関する研究発表が行われ、出席した学者の間に『聖岳人』の重要性が、あらためて印象づけられたという。（このシンポジウムに招待されて出席した本匠村柴田幸夫教育長の報告）

出土地住民の一人として、まことに意を強くさせられるニュースである。

（日本列島の旧石器人骨）

年間の降雨量が多く土中深くまで酸性度の進行が見られるわが国では、長い年月にわたって土中に骨の残される可能性は極めて少なく、旧石器時代の人骨で現在までに発見されているのは、わずかに次の例に止まっている。

牛川人　一九五七年、愛知県豊橋市牛川町で出土。左上腕骨。一時旧人といわれたが、現在では新人とされている。

三ケ日人　一九五八年、静岡県引佐郡三ケ日町で出土。前頭骨・頭頂骨・側頭骨と骨盤の一部など七片。

浜北人　一九六〇年、静岡県浜北町で出土。頭骨・鎖骨・上腕骨などの小破片。

聖岳人　一九六二年、大分県南海部郡本匠村で出土。後頭部・前頭部骨片のほか骨器など。

港川人　一九六八年、沖縄県沖縄本島具志頭村で出土。明確に区別できるものは男性一体、女性四体で、外になお四体の細片。このうち男性の一体はほぼ全身がそろう。

※隆起サンゴ礁である沖縄の島々には、この外に本島で五ヵ所、宮古島で一ヵ所、同じよう

に古い人骨が発見されているが、資料に乏しいので、省略する。

このうち東海地方から出土した三例はいずれも生活の重要な器具である石器を伴わず、かつ、採石場の石灰岩の割れ目から発見された部分骨で、これから得られる情報にはおのずから限りがある。しかし、いずれも足・手などの長骨を含むことから、特殊の方程式により体長の推定がなされている。それによると、

牛川人（女）　一三五センチ
三ケ日人（男）　一五〇センチ
浜北人（女）　一四三センチ

と、いちじるしく背が低く、ピグミーのような小柄な体格の持ち主であったことがわかる。

現在、日本列島から出土した旧石器人骨を代表するのは港川人である、ほぼそろった男子一体のほか、それを含め完全な頭蓋をもつ頭骨三体の発見は、これまでにない数多くの貴重な情報をもたらした。そして、

①約一万八千年前のものとされる港川人の頭蓋の特徴は縄文時代人によく似ており、中国南部の柳江人（旧石器時代後期）に近い。

②大腿骨から推定される体長の平均は男一五六センチ、女一四四センチ程度で、東海地区から出土した人骨と縄文初期の人骨のほぼ中間にある。

③ただし、骨の特徴は縄文人よりもはるかに原始的である。

などのことから、沖縄諸島や東海地方で発見された人骨は、中国南部に由来するほぼ同一系統の人骨と考えられるようになった。

（聖岳人骨の特異性）

これに対し、大分県聖岳人だけは非常に異なった特徴をもっている。

もともと聖岳人は、その生活器具である石器を伴って出土したことから、体の一部分の骨ではあるが、資料的にはもっとも信頼度の高い化石人骨とされ、（京都人類博物館鈴木忠司氏）歴史書の多くには、次のように書かれている。

日本列島で発見された古い人骨の多くは、いずれも当時の生活用具である旧石器を伴うことなく、石灰岩の裂け目から発見されたものだが、大分県の聖岳洞穴からは、一九六二年にはじめて旧石器と一緒に古い人

骨が出土した。頭骨の一部、一〇センチほどの破片だが、小片保氏らによると、骨が厚く、後頭部の形などが北京郊外周口店洞穴の上洞一〇一号人骨（男）に似ているという。その年代は約一万四千年前とされている。（一例として…佐々木高明「日本史誕生」）

中国北部の周口店上洞人の体長は男一七四センチ、女で一五四センチと大柄で、南部の柳江人とは明らかに異なっている。大分県の聖岳人だけが、その特徴からして「新たな北のこの系列」につながるのではないか……というのが、部分骨という大きな限界を越えて、なお研究者の注目を引く大きな理由となっている。

このように聖岳人が、日本人の起源を探る上で非常に重要な位置を占める人骨であるにもかかわらず、発見から早くも三十三年が経過し、出土地周辺の人々からも忘れ去られようとしているのは残念である。

聖岳洞穴と人骨のことは、実は発掘に当たった別府大学より提供された資料により「佐伯市史」と、出土地の「本匠村史」にかなり詳しく書かれている。ただ、この中で、発見された人骨に関する部分は、担当が新潟大学であったこと、内容が歴史というよりも医学や人類学の分野に属し、専門的でありすぎることなどから、特徴的な部分を要約して紹介するかたちに止まっている。「地方史」の扱いとしては当然のことと思われる。

しかし、多くの人たちに、聖岳人の重要性を正しく理解してもらうためには、この人骨についてもっと詳しく、そして分りやすい説明がなされなければならない。そう考えていた矢先、本匠村教育委員会から「この人骨についてその保存状況を直かに調査確認して欲しい」との突然の要請があった。まことにありがたい配慮であった。

（新潟大学を訪ねる）

昨年（一九九四年）三月、川野義和氏（本匠村教育委員会）と私は、聖岳人骨の標本が保管されている新潟大学医学部を訪ね、熊木教授（解剖学）の案内で医学部所属の人骨標本室に入った。

この標本室には、古人骨研究の権威で聖岳人骨の発見者、研究者でもあった故小片保教授が生前、国内外から集めた貴重な標本千数百点が収蔵されている。いずれも新石器期・縄文期の人骨であるが、ただ一つ聖岳人骨だけが旧石器期のものである。このためその扱いはまさに貴重品並で、損傷を防ぐため厚く綿花を敷いた桐箱の中

に、一片ごとに和紙に包まれて保管されていた。私たちは箱から取り出して一つ一つ検証するとともに、多くの写真を撮影し調査を終わった。大きな感激であった。

新潟から帰るとまもなく、小片保氏の聖岳人骨に関する最初の研究報告書を入手することができた。しかし、これだけで十分とはいえない。小片氏がその後の研究をまとめられた新しい資料も必要であった。小片氏の新しい研究成果は、一九八〇年十一月に開催された「骨から見た日本人の起源」と題するシンポジウムで小片丘彦氏（鹿児島大学教授）によって発表された（小片保氏は急逝）。この貴重な資料は、二宮淳一郎氏（別府大学名誉教授）にいただいた。

現在出ている学術書・一般向け啓蒙書の聖岳人骨に関する部分の記述は、ほとんどこの二つの資料から出ていると言って間違いない。

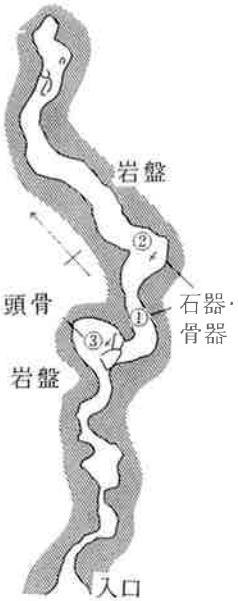
それからかなりの日数を費やしてこの資料を読み、おぼろげながら聖岳人の頭部をイメージできるようになって、ようやく調査報告書をまとめ、これを本匠村教育委員会に復命することができた。

本稿は、その時の調査報告書から一部を抜き出して書き改めたものである。何分にも素人の試みなので、皆さんの厳しいご検証をいただけるとありがたい。

二　聖岳洞穴

（位置と形状）

聖岳（ひじりだけ）は、大分県南海部郡本匠村大字宇津々にある。（別図参照）県道三重弥生線を本匠村役場の手前で右折し、谷川に沿って村道を一五〇〇㍍ばかり進んだ所にある急峻な石灰岩の山がそれである。高さは約三六〇㍍、西側約一〇〇㍍、東側約二〇〇㍍の地点より岩壁が露出し、その中間の高さ約一三〇㍍の位置に大きな洞穴が開口している。これが聖岳洞穴である。



聖岳洞穴平面図

全長は四五㍍、この間に二㍍のゆるやかな傾斜をもつ床面があり、幅は平均一・七㍍、高さは平均三㍍で奥に行くほど幅・高さ共に小さくなる。洞穴のいちばん奥には外部に通ずる大きな裂け目がある。

なお、入り口から数㍍の場所に高さ二㍍の崖がありハシゴかロープがないと前に進めない。これが長い間人の出入りを妨げ、遺物の保存をよくしてきた大きな原因と考えられる。

（層位）

考古学では、堆積層の各層のことを層位といい、基本的にきわめて重要なことなので、すこし詳しく書いておく。

洞穴の床面には土砂がかなり厚く堆積し、層位は大きく分けて次のようになっている。

第一層　表面の黒い土の層（厚さ一〇～一五㌢）

第二層　粘土質の軟らかい砂礫まじりの層（厚さ一五～二五㌢）

第三層　粘土の層（二五㌢より下の層）

【第一層】

色が黒く乾くと軽い土で、層の中に宋銭や金属器の破片が散乱し、中世のものと思われる素焼きの土器片などがあり、これに混じって人骨片がかなり多く発見された。

第一層の堆積の仕方は、奥の方が少なく、中程から入り口に近付くほど厚くなっているところを見ると、洞穴の奥にある大きな割れ目から流がれ込んだ沖積土と考えられる。

【第二層】

この洞穴の鍾乳洞活動が止んだ後、洞内各部の割れ目、または奥にある割れ目から流れ込み堆積した、粘板岩の小石を含む細かい石混じりの層である。

縄文時代前期の雨の多かった海進期（現在より海の水位が二㍍ばかり高く、内陸深く海が進入していた時代。いまから六五〇〇年前ごろ。）に割れ目から流れ込んだ岩壁上部の土砂が堆積したと思われる。

この層からは何も発見されなかった。

【第三層】

出土地点の断面図

粒の細かい粘土層で、かって鍾乳洞が活動していた頃流れ込んだ土類が、何万年、何十万年の間に沈澱してできたと思われ、場所によって一メートルから二メートルの深さがある。

遺物の含まれている層は、第二層の小石が第三層の粘土と接する部位からいくぶん第三層に入った位置で発見された。この部分の粘土はやや黒味を帯び、下の粘土層とははっきり異なっている。この粘土上部が細石器文化層で、この層の中から少数ではあるが細石器の出たことは、この洞穴の利用が一時期に限られていたことを教えてくれる。（住居跡ではなかろうという意）

※第二層が形成されたのは、地球が温暖化に向かった約一万年前より後、第三層が形成されたのは約一万年より以前のヴュルム氷期（一万年～七万年前）を含む長い年月と考えられている。

三　遺物の出土状況

この調査で発見された遺物は、石器、人骨、人骨を用いた骨器などで、その数は少ないがすべて貴重な資料といえる。とくに人骨が旧石器とともに発見されたことは、わが国で初めての例である。

（石器）

石器は数が少なく一四点ばかりである。石器は図面の①の地点から細石核（石器図の2）と数点の細石刃（同5・6・7・8）、②の地点からナイフ形石器（同1・4・3）が発見された。

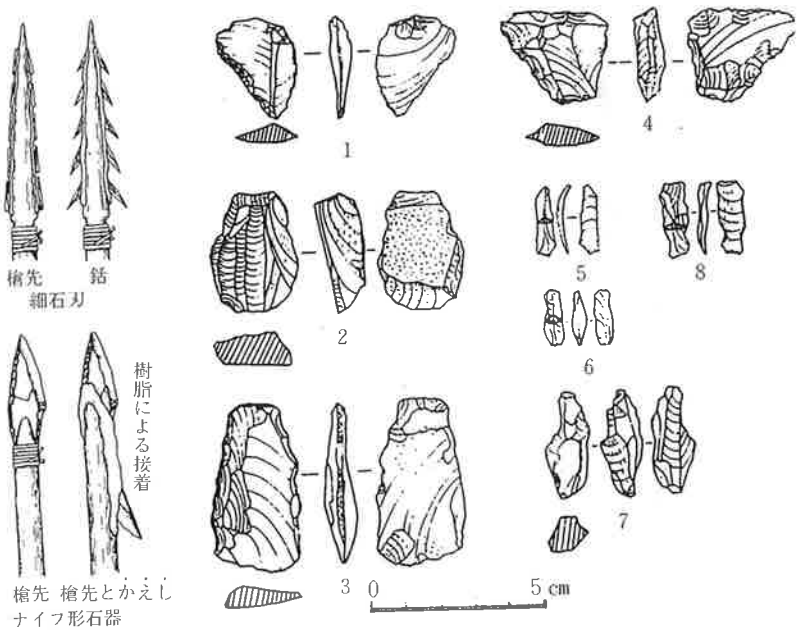
○石核は石刃を剝離するための母石で、剝離の方法が一つの特徴をなしている。

○石刃は石核から剝離して作られた長さ二センチばかりの小型縦長の石片である。数点出ているが形にはばらつきがある。石刃はいくつか組み合わせ、木棒の側面に埋め込まれて使用された。（図参照）

○ナイフ形石器は剝片の一側面に刃をつけたもので、梯形のもの、ノミ形のもの（台形石器）などがあり、いずれも木柄をつけて使用された。（図参照）

このナイフ形石器はいまから三万～一万三千年前の間に使用されたとされ、年代判定の一つの目安となっている。ナイフ形石器の後に出現したのが細石器（石刃など）であるから、この二種類がいっしょに出てきたのは珍しい。

この洞穴の石器出土の状況には、次のような特徴が見



られる。

1　量は少なく、散らばっている。

2　すべてが細石器で、一点だけ石核がある。（石核は、石刃を作った場所にあるはず、それにしては石刃が少ない）。ナイフ形石器が混じっている。

（人骨）

人骨は第一層と第三層から発見された。このうち第一層に散乱していた人骨は歴史時代のもので、課題の人骨は第三層の上部から発見された。

別府大学の賀川光夫教授によると、その出土状況は次のようであった。

「洞穴は中央でW状に曲がり、その部分はいくぶん広く、層位が明確で第一層から第三層まではっきりと観察することができた。第三層の粘土に埋まり台形石器とともに腰椎の一部と足骨が発見された。この骨と石器がいっしょとすれば大変興味深いと思った。その翌日、大きな鐘乳石の落ちている下側の第三層から頭蓋骨の一部が発見されたので、はじめて『旧石器時代の終わりの頃の石器を伴った貴重な人骨』ということが確認された。頭蓋骨の出た場所（洞穴図の②の位置）には、洞穴を塞ぐよ

うな状態で落下した大小の鐘乳石が、第二層のやわらかな砂礫層に達し止まっていた。この状態から落石は『第二層の形成される過程の、ある時期』に起きたことになる。天井の離断した場所に再生した鐘乳石の状態からも、すでに相当の年月を経過していることがうかがえた。洞穴の第二層はヴュルム氷期が終わった（いまから約一万三千年前）その後の、温暖多雨の時期の堆積物と考えられるので、第三層の粘土が堆積したのは、それ以前のヴュルム氷期であったということができる。」（本匠村史）

出土した人骨は次のようなものである。

○足骨（距骨）一点。この骨の特徴は、ヒトがたたずむ時に使用する滑面が、現在のヒトよりも広いと観察されている。

○腰椎一点。特徴に乏しい。

○頭骨。前頭部の小片一点。後頭部のやや大きい破片一点。この大きい破片が課題の人骨であるが、その特徴の細部については、項をあらためて検討する。

（人骨器）

第三層中からは石器、人骨とともに人骨で作られた道具二点が発見された。

その一つは脛骨の先端を焼いてドリルのように研いだもので全長は二〇㌢である。この脛骨の断面は三角形で、骨の形から現在の人とは大きく違っている。

他の一点は橈骨の先端を焼いて偏平なヘラ形に加工したもので全長は一七㌢である。

この人骨器は原始的な祭祀に使用されたものではないかと考えられている。

（動物の骨）

通常人骨といっしょに出ることの多い動物の骨が一点だけ発見された。ツキノワグマの左尺骨の一片と判明している。

※聖岳洞穴には昨年二回ばかり入った。一回は本匠村文化財調査委員の人たち、一回は別府大学に来講された中国北京自然博物館の周国興氏（上海、復旦大学教授・人類学）と案内の二宮淳一郎氏（別府大学名誉教授・生物学）柴田幸夫教育長といった人たちに従って入り、洞窟についていろいろと教えをいただいた。しかし、発掘調査の内容については、じっさいに知るところがないので、この調査に当たられた後藤重巳氏（別府大学教授）よりいただいた資料によった。

なお、前記の石器類は、現在別府大学博物館に常設展示されている。

（以下次号）

付記

参考文献は、最後に揚げるのでご了承いただきたい。

案内図

洞穴入口